

◆  
線上  
聖の  
アリア

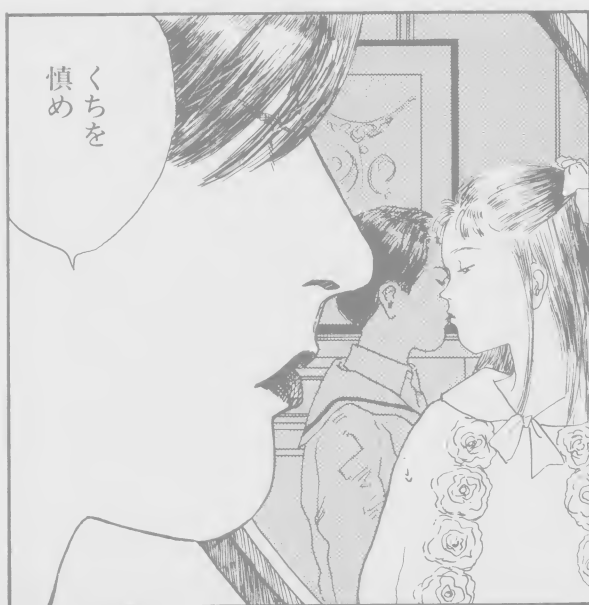
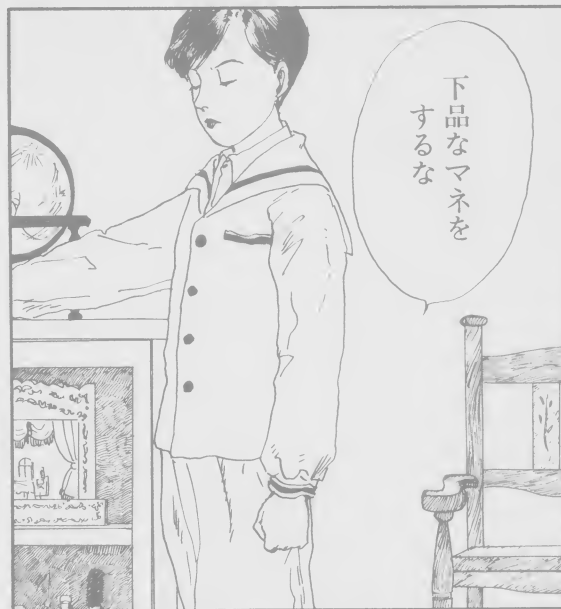
---



礒田ゆり子

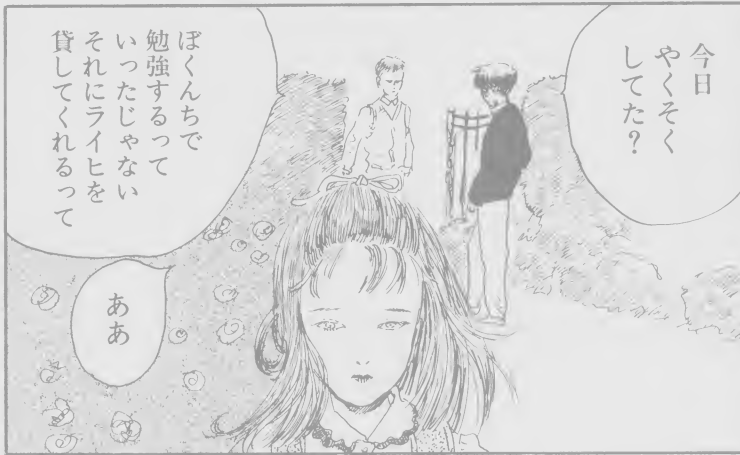




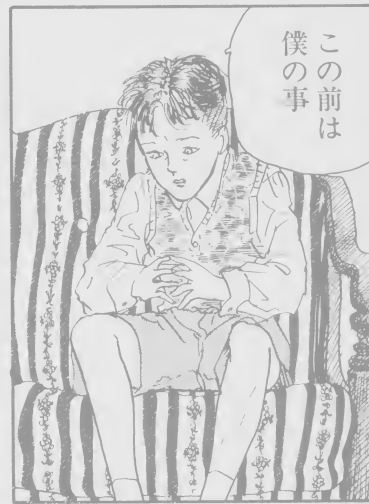
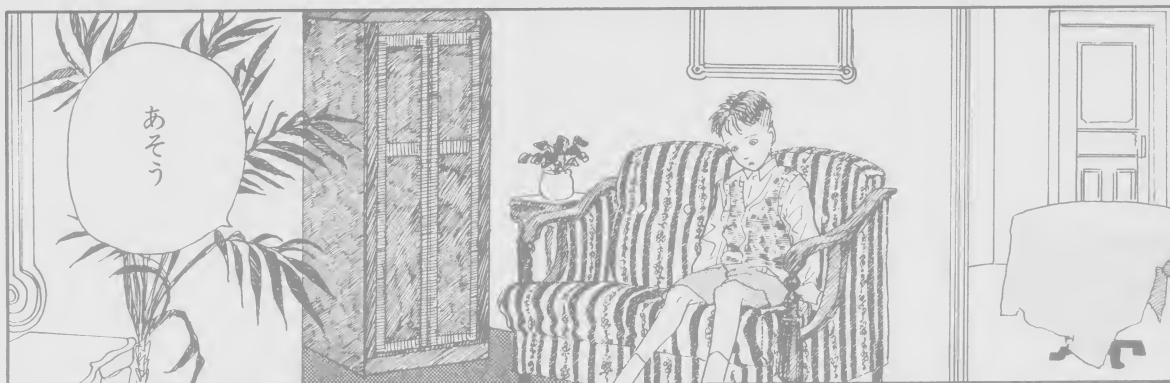




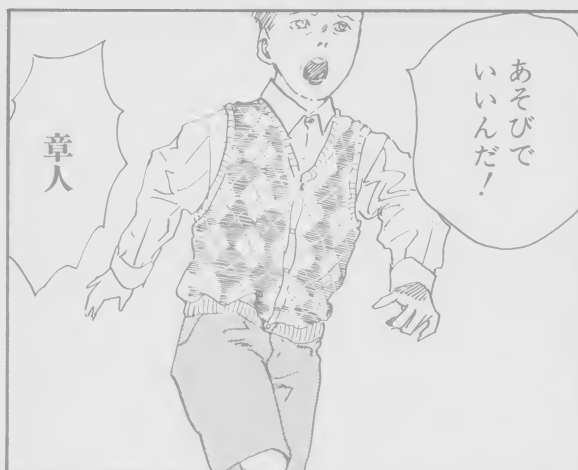


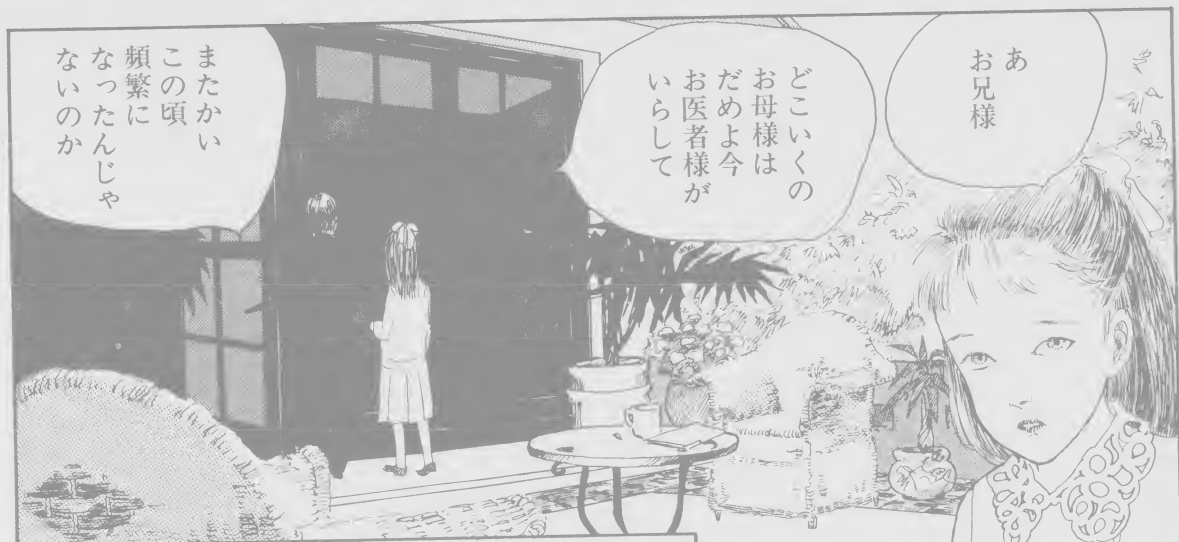




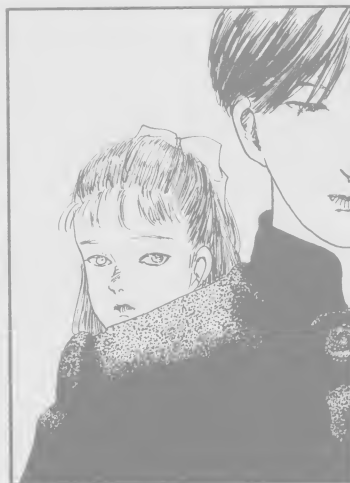
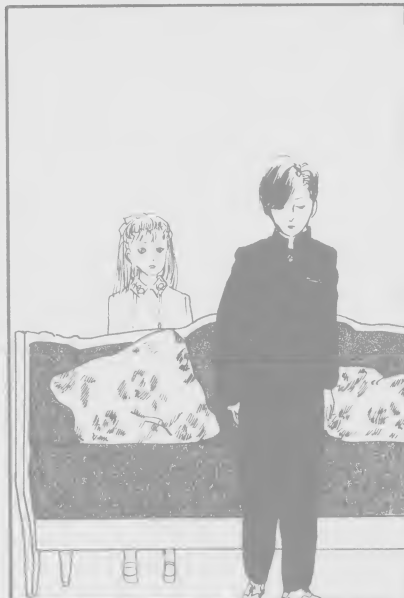










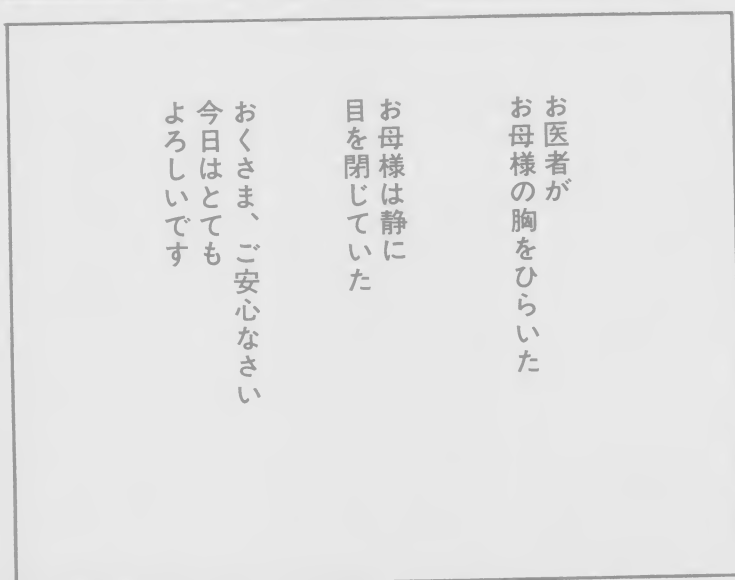




そうだったあるとき  
いいつけを守らず

お母様の部屋を  
うかがうと

睡蓮のタペストリ…に  
不寐な黒革の鞆が  
置かれており

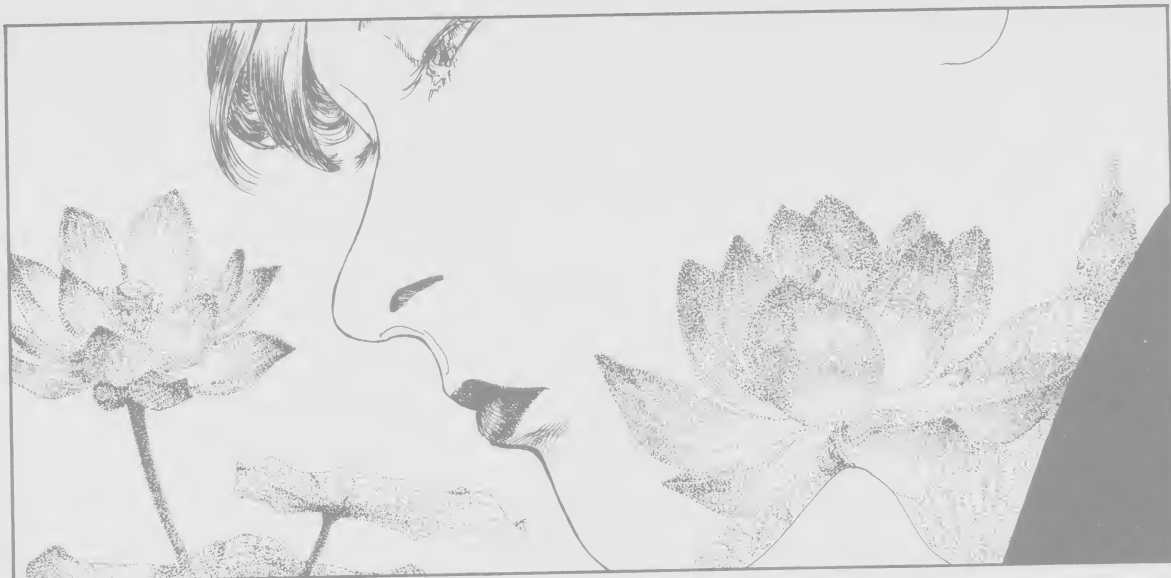


お医者が  
お母様の胸をひらいた

お母様は静に  
目を閉じていた

おくさま、ご安心なさい  
今日はとても  
よろしいです





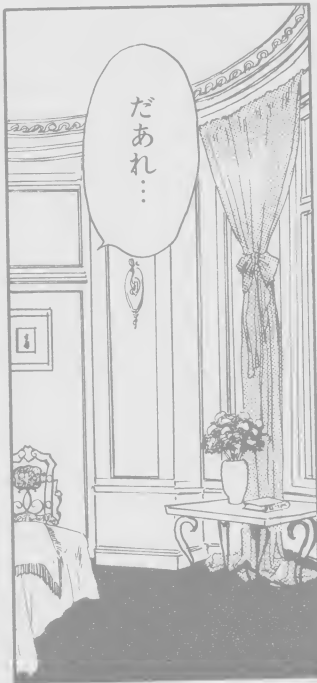
おくさま、  
今日はとても

はいっちゃんかん  
お母様は  
よくないのだから

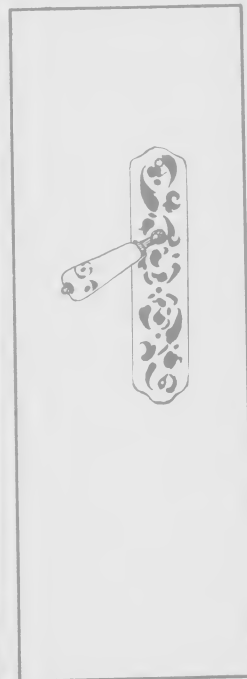
はいりません  
ぼくたちずっと  
良い子にしています



僕 お母様

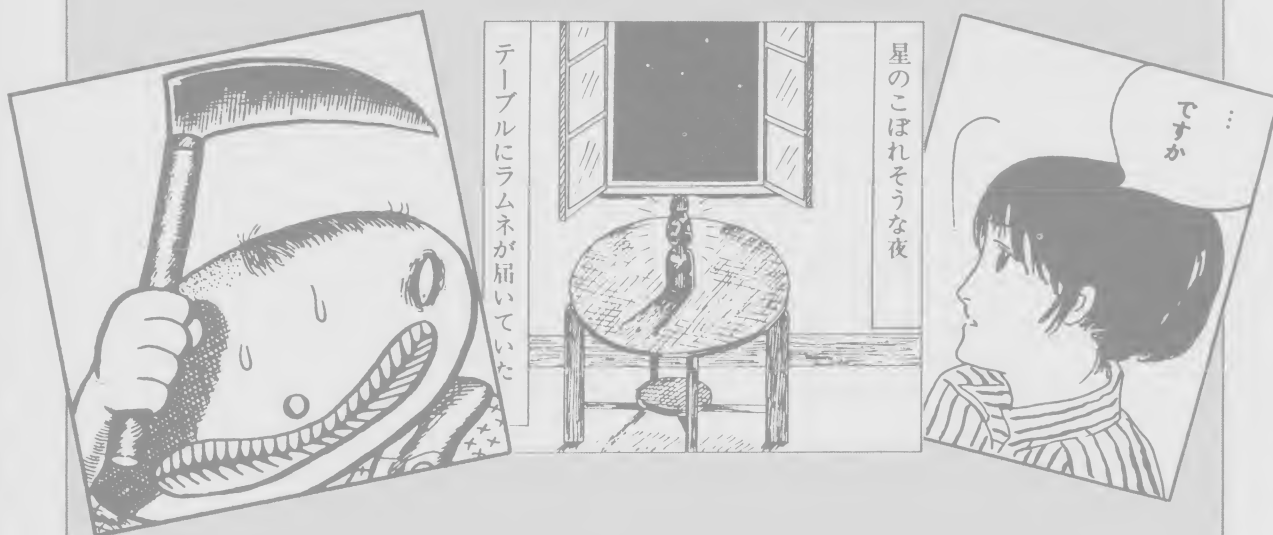


だあれ…



END

ガロ名作劇場番外編  
私の新人時代



イラスト：花輪和一、鴨沢祐仁、近藤ようこ

# 追憶の彼方へ

花輪和



ガロに入選した頃の事を、現在思うとやっぱりスツカスツカ、スキップしてアパートに帰った夕方を思い出す。東京は池袋に住んでいて、近くに池袋電車区があつて山ノ手線の車輛がいつばいあつて、その上に歩道橋があつて名前がドンドン橋？とか言つてたようだった。で、その橋の上に散歩に行くのが好きだった。アパートから工場まで走つて約5分。月末には本屋にスツカスツカスキップして行つて、白土三平氏の表紙のガロを胸にかかえて、あつて早く中味がほしい！で、途中のラーメン屋に寄つて飯を食いつつガロを見た。阿部慎一氏のマンガに強くひかれて、なんて絵がうまいんだろうと感動した。自分も早く入選して一日中マンガが描ける身分になりたい！とそればかり思つていた。とにかくあせつてあせつてスツカセすにはいられなかった。夕方など星がつかめたらどんなにいいだろうと思つて力いっぱいとはねたけどだめだった。星がつかめたら即マンガ家だと思つていた。絶望のため息をついて、どういふようにマンガを描けばいいのかまつたくわからなくて、絵だけならまあ何とか描けるけど、フキダシが入るとジャマで絵が描けないような氣もした。とにかくあせつていた。で、工場のおばさんたちが、池袋にマルコがきたからねエ、そう、今度マルコがきたからねエなどと話すのを聞いて、マルコつてな

んだらうなあ？と思つていた。一体何が出来たんだらうと氣になつていたが、ある日、駅に行つてみるとバだった。なんだこれのことじゃないのか？マジやないんじゃないか。そうマルコとかいうものがあつたです。で、山ノ手に乗つたら急に怖くなって、ドアの所でうつむいて、上野アメ横に行つて、ズドンと元氣になつておなじみのモデルガン屋さんのショーケースを見物して、4軒まわつて、深い満足のため息をついて、ハアッよかつたア！とうれしくなつて、また電車の中でうつむいて小さくなつて帰つて来た。とにかく今思えばクライクライ日々があきるほど続いていたという事です。映画といえば池袋の文芸座、おでかけといえばアメ横中田商店ともうハンで押したようにきまつていたつけなつと。ふつ、ばりかみたい。当時あれほど強く望んでいた一日中マンガが描ける身分を手に入れて、さあ！どうです！うれしいじゃありませんか！と、思えるハズなんだけど、どうもピンとこない。ガロに入選の葉書きをいただいた時は、もう卒倒するくらいうれしかった。で、その時いただいた原稿料の現金書留封筒を今でも保存してあるけど、あの頃は本当にマンガを描く時間が無かつただけにムダなく使つたのネ。で、今はもうありすぎて、ゼンゼンだめ。と、以上のような事が申し上げられるのでした。